

解体社

「TOKYO GHETTO」

唐突に女が倒れ、その体を男が荷物のように担ぎ上げる。むきだしになった肩や太ももを、バーカッショーン演奏よりしづく、リズミカルに手手でたたき続ける。見る見る皮膚が張れ上がりっていく……。

東京・本郷の住宅街の真ん中、細い路地に面してそのまま物はあった。人間の身体と同じだわり続ける解体社が一年年から拠点としている本郷DO

K。清水信吉作・構成・演出の新作「TOKYO GHETTO」は、観客が三十人も入れはいっぱいになりの小空間の特性を生かした、緊張感に満ちたパフォーマンス

だ。
舞台上には鉄パイプの足場があり、さびれた工事現場と組まれ、さびれた工事現場とも見える。も貨物船の船倉とも見える。登場するのは、九人の女性と彼女たちを競争しているようないつの男性。現代日本の経済的繁榮とは無縁の、流れ歩く人々だ。演者たちは無表情のまま、舞踏の要素を取り入れた乾いた動きを繰り広げてい

決して楽しいイメージではない。虚飾をはき取られた生の身体。生理的で痛々しいと感じる感じられるシーンが連ねられる。にもかかわらず、目をそらすことができない強い力を持った舞台だ。

小空間にあふれる緊張感

小空間ならではの密度の濃い舞台となつた「TOKYO GHETTO」=撮影・宮内勝



すりガラスや鏡などの小道具や映像を使った視覚的な工夫も効果を上げている。日野星子、熊本賛治郎、中嶋みゆき、丸岡ひろみ、小杉佳子、森山雅子などが出演。照明・長谷川和琴、音楽・成井輝光。

（今村修）
12日までの金、土、日曜日に上演。